

第46号

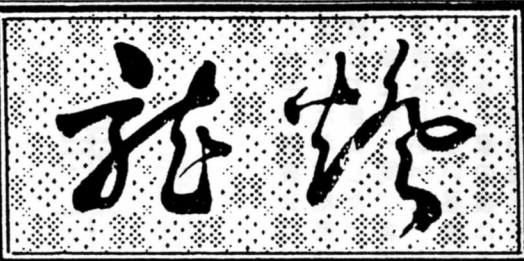
大阪市史跡 龍溪寺墓所 宝登山九島院

発行所

〒550-0022 大阪市西区本田3丁目4番18号  
TEL 06(6583)2725 FAX 06(6583)0908

発行者

第二十五世住職 奥田啓知(智證)



# 中学生『反抗期』消えた 自分自身の主人公になれ!

ありがとう大阪近鉄バッファローズ! がんばれ大阪ドーム!

産経新聞に「中学生が消えた反抗期」という記事が載っていました。教育シンクタンクの「ベネッセ未来教育センター」(東京)の意識調査で分かったそうです。

調査は今年二月、関東の中学生一、三年生千三百五十五人を対象に実施したところ、家庭で過ごす時間について、半数を超える中学生が「のびのびできる」「安心できる」「楽しい」と回答。「退屈」「イライラする」「孤独」といった否定的な回答はどれも半数以下で、約8割の中学生が円満な家庭に満足していることが分かりました。

また、親がどうい場合で絶対に叱ると思うかを複数回答させたところ、「先生の言うこと聞かなかった」「近所の人に挨拶をしなかった」「朝家族に「おはよう」と言わない」はいずれも10%前後と、親が子供を叱らない傾向が垣間見られるとのことでした。

フランスの啓蒙思想家ルソーは名著「エミール」という書物

のなかで、青年期の特徴として自我にめざめ、精神的に自立していこうとする青年を「第二の誕生」ととらえ、心理的離乳のさまを「熱病にかかったライオン」と表現しています。

「第一の誕生」はこの世に人間として生まれること、そして子供は親に心身とも依存して育ちますが、中学生ぐらいたなり青年期をむかえるころになると自分とよく似た、しかも身近にいる親の存在を目障りに感じたり、無視するなどの行動にでます。その強い自己主張と激しい感情表出にさらされる姿を「熱病にかかったライオン」と表現したのでです。

この調査からは、そのような姿は窺いえません。家庭円満は大事なことです。反抗期は子供が精神的に自立するうえで不可欠な過程です。「反抗期を持たない子供がどう自立するのか心配だ」とは、調査をまとめたシンクタンクの深谷昌志教授の弁です。

「無門関」という禅の語録にでてくる話ですが、師彦和尚が「目を覚まし、騙されるな」と自分自身に忠告しているのは、金銭的な問題やトラブルのことではありません。私たちが世間の常識に縛られていることをいっているのです。自分自身が他の奴隷になるのではなく、私たちは自分自身の「主人公」になってこそ、仏教的なアイデンティティ(主体性)の確立といえるのです。

こうした「第三の誕生」をへて人は仏(覚者)となるのです



